近世怪談霜夜星五巻

東都　種彦著

第八回　種々の茶器　いとゝ舟

往年旅彈ずのうち俳諧を媒婆なしうる。道具屋藝次い兎角結計のうちふい疎くゝく。博繋みゝく金を得んとをはりへ。ぞも夫もうちつづくく仕合あゝく。又媒公をあさんみも世人皆三次ゞ言葉をくゝ両舌を弄さるを知るべ。誰あゝく彼を来るなるなく。いふせんとうふなり。下總國銚子といふところふ旅館あゝく。古の責主ふとりいと日代とあゝく彼処へおもむく中孫が門弟。松嶌平三。竹中吉三郎が門弟。竹中半七ち

場懸となしその餘は緑竿伎の權次太郎うちの助八と云ふ愚人おぐ
俳優をるく。正月頃より興行なせしが。その外ある繁昌にて一両
餘の金利得。三月戯場果くのち ひとまづ故郷へかへらんとかの金
稟へいと腰の重けをさへ〳〵く。只一人舟橋をふみはるばるへも近へく
ちりいんをるく三十をりある賈客と云ふる男と路連のごくるから。
互ふをるとの火をどかをるが。彼路連の男五次ふ數く。いふふ旅の
此方ふをるとをれくの所をぐかつる者あるが。今宵はおなじ旅店ふやど
つまりへしやとをくふ。夏冷をられほどふ暑しく又一里ほど行らしをべ。
彼男むらいの林をゆびさしくいふ。あれ一本すへむらひの小高き処を
をや太神宮の樹林あらん。彼所ふ一軒の酒房あれば旅人ふ好こ
をんどやをるぐんど少時憩をつるれをるぐをあをんとをひつ。懷中

らう螢火おりをり出く独吾説ふいつらく。嗚呼世ふ得ま得たる金
ふくく又得ぐたるも金ふをくめのなし。今僅の金さへあらんをどあら
べ。五十両六十両の利を得んと。嚢中の物を握がどし。いをとをもの
をふく成田辺をぐいかをるが。あをも金一両も出来べ。只空し
くををを又くく。人の舵ををんをうり外計なしと物語るう
ち。天聡皇の宮居をりた酒房のをへふ生をり。三次へ坐をもち
を急げばと別を告くいたをぐんとを。彼男三次が袖をひくく
をををべ。三次をもんまへをく。酒房の床机ふ腰をりくをとむ
彼男小奴ををびく酒肴を出さを。ひとつる三次ふ進むを次
私ふをのふへいを持つけざる金本金ををいを爰ふ三十両ふ
を。ををや此奴葬巫をあくををををををををかをつけ。いをを酒ふ酔

ちちんとの計来あらんも知るべからんと。喉のづぶくと鳴をとらん。
いとゝ不喫子ありといらくく一杯をも飲ざれば。彼男つゞけ
飲ふのゝるが大ふ醉を發し。草鞋をはくるゝ管笠を被
前後もしらず熟睡なる。三次をゞめくゝ仆ちつゝ側ふある鉢子に
もり一杯飲ぐ舌鼓あるし。嗚呼人い體面ふもらずとゆ。彼い
いとをとぐ酒あいくふをさんと志るるあらん。斯と知べらくもう
飲ぐ憂をるるんめをと。又五六杯飲るふ彼男さらふ起
あぐゝ。三次ゝをいらち。最早申下刻なるあとゆりをとくゝる間
ふ。彼男の挾嚢懷中ゝりまぐりから書簡ゆりのゝの赤散ば。
三次嘯々といひつゝうありめんとるし。不斗彼書簡の上がゝを
又るふ。道具屋五郎次といふ名當あり。さくい此男も我と同じ

結計をとるゝめあらんと。おもらゞ彼書簡をかしゝうゝれば何某殿
かねぐ茶支を好めひし處ふ葛西領飯塚村ゝ戸源藏といふ處士
道堤が茶壺。守位が茶杓。甚四郎が茶筅一路が手取鍋その他
種々の茶器ゝりふゝ。何卒四十両ほどふ買ゝり。何某殿へ
さゝあぐんほどあらば幾許の利やあらんと其支委細ふ書つけあれ
ば。三次ありゝ呵々とゝらいひ。常言ふも良者の田い実のるを早
しゝらんに十両ふあるる金を利得又不意金のゝるふゝり
ゝぬかのふふ此男さゝふいひ。独言いこの一支あるべく何某殿
茶支ゝ好のふいひゝ畧知るゝとゝいろゝゝ飯塚村へ赴き
此茶器を買ゝらく。何某殿へさゝあぐんふ幾許の金を得ん
も知るべらゝ。ゝに幸のいとぐゝらゝゝといふゝ彼男呼人といふく

霜夜星巻之五
あ
松と
もゝたろさく
十二文

霜夜星巻之五

床がへりをするなバ三次うちおどろき。ちらちらざるおのれちかく
酒糟をとりあげ。嗽をなしつゝ向ぐ東をむき時刻を小奴に問ひ
などする間に彼男又熟睡なりし。三次が殿び管笠と手布みな
酒房の小奴の疑ハざるうち床机にのこし。手浄るちぶりくらふ
ところを足早に逃走。はや黄昏なれバ舟橋に宿をとり。翌春の
夜のあけやらぬうちに小旅宿をたち出て路を急げバはや辰
下刻飯塚村へ来れり。三次郷人にむかひて此辺に乙戸源蔵と
いふ處士やあると問ふに彼所なりとおしへけれバ大に歓び門辺に
立て案内をこへバ。應と答てうち出るにいづれも武士の浪人とみ
ゆる大男ハ三次が體面をつくづくうちまもり。足下ハ道具屋何某
が甲斐にやあらざるや。日外もいひしごとく彼茶器かへしくれバ

あらざれど。我かく落魄なし只渇ほしさに金ハ四十両を一両にて
くも售りぐさしつ。なるだけ早く来りなバ。なるべくかへりみへと小屋
なくもいひけるまゝ。三次私にかの其くひて。さくハ彼五郎次一両もやらずく
買とらんと。數度其のところへも来りしとかくいひたるは手をあげて頭を低
くいふハ。今日野子彼にかはりて来りしハ。彼茶器の買主あらば。
茶器をわたし左に金を受取るなれバ三日を過ぎ信と
今日ハ曲てけふここに預りおかんといひつゝ。懐より金三十五両、一包
バ處士頭を左右にふりかへり。日外もいひしごとく四十両ならでは
用るところあれバ。家に傳来し茶器を售りたるとうけ
なれバなほとけしかめらしつゝ立て壁厨より茶器の
とり出せバ三次六七分心を安じ。つくづく膝をすゝめくいつけ

るゝ。先刻ふもいひしごとく三五日のうちに急度五両をもらるべし。是いとれもぐの典物とも云へと己が着たる両衣ふ只一腰のみ。さんとうさんくさ出せば。彼處士莞爾とゐる。足下いまだ若人ふ似氣なれば説うた男。日外来たし五郎次とふ甲斐ふ只管三十両ふ求めもえりとたられを許さば。足下いかくのごく老実なれば。正しく五両をも賜らるべし。いふもあの典物ふく茶器い委く預べしといふふ。三次ふ歓び金を改道具をとりけり。異日来るべしとく急ぎ故郷ふかへり。その疲ふ兒童の春待ごく寢もやらず。いと日頃目利ふ疎しとく。同子の物異名しく目無三次とらびるを面悪くもひしふ。此茶器ふ彼道具屋の目利ひしを。先へらるく買とりたれば。百ふ一り利を得ぬとふあしと。明るを

とらく何某殿の館ふいたり。如此その夏いひしとべ。番士眉をひそめ。尤相公茶支ふ好をゆへど。かゝる器物を索ふとふ少さふらひべ。鬼も角もやとくとんと裡へいり。少時あんく彼番士立出相公ふ様故を問へさふらへど。此方の館ふくもの茶器索りとめしおぼへなし。門遠ゆやあるらあと答るふ三次ふ心的鉏鋤あたるロをとゞもやゝび須臾言葉も出ぐりしゝ。急度深念をさぶる。ゝちらび同子の者へ責ゝくもゝ十両二十両の利を得んとやとるべしと夫彼とふやられど。一目見るるうち冷笑ひ今ふ目無三次が仕業や。ちとふ皆偽物ふく僅の金ふ人ふ嫌の空言ふ姑計あるべしと。高賣の道ふ疎しと異口同ふいひのこられば。三次ふ心あらびも路をいとられ。飯塚村へゆさられ

彼家ハ[illegible]戸ざしくあり近郷の人ふ同ふ此舎ハりと空室あく。
日外何[illegible]いとし浪人一月ばかり住りるが。其後いづくへか[illegible]
[illegible]く知る者なしとふふ。三次[illegible]めく 棍徒なることと
づけと更ふ詮[illegible]べなく。茶器を大地ふ投つければ。ゆくりの郷人
[illegible]。風子ふやあらんあとおいひる。此物語の後り
といふ。伊兵衛を於澤が許へ接脚婿とせ〜ける。かゝる珍奇
出来ふり。[illegible]あれど強三次が業なるわゝ亡霊のさゝりふ
もあるべし。命ふ美ハなれと千辛万苦〜く利得し。金本
金さへ光棍の為ふ奪ふ[illegible]多年媒を哀とし両舌をつく肝煎
[illegible]をもとがりし。因果車のめぐり来り〜あやあらん。[illegible]
[illegible]彼須藏といふ浪人を何人といふふ。是則卯月官太夫なり。往

年求次郎を殺害ふ〜。[illegible]場を立退奥州のさへ[illegible]
[illegible]又下總国銚子といふ處へ来[illegible]し刈彼三次とふ愚人三十五両
の金を得て古郷へ[illegible]を知る。同子光棍門平といふ者を買客
ふ扮セ根[illegible]この書簡をおとさ。三次をとらへ計り[illegible]
門平ハ[illegible]の日酒房ふ於[illegible]
太夫が[illegible]ふ来れば。[illegible]三次ハ茶器を買[illegible]
官太夫門平を[illegible]。首尾[illegible]
ちあ[illegible]。元来空房を[illegible]ゞほど借[illegible]れば。次日[illegible]ふ
[illegible]づけ。門平を[illegible]葛飾の[illegible]と。沼田の渡[illegible]
[illegible]づく[illegible]。空俄ふ結陰ひとり[illegible]両のさと[illegible]。二人ハ松の
豆木ふ[illegible]。袖笠ふ路を[illegible]津頭ふ[illegible]

津長空を仰ぎくいふ。西山ふ蝶て雲といふ出くるくさゆらるる。西風のつゝく吹ぐ〜とひつ。舟を轉セあるこの岬ふうちつくる。三人い舟ふ乗うるかり。門平ふ斗官太夫ゞ掃枝の斤てるるをるく。其故を問官太夫外ふ乗合なきをるく。そぐる支へあらじと語りいでるへ此佩刀い道るこふく得さつしゞ其後求次郎を殺害の刺銃銀ふおりこる故。いふふく行てこと抜出しく明平ふえセ又懐中ふり挾嚢をとり出し。此品も求次郎が所ゆく三谷ふく剽悍〜とる五十両ありつるゞ。日あらびしく空〜くなり。さくもやらびふの年月懐中るセしゞ。ふの頃又足下の計束ふく。ふし〜く重こを得うと物語るうち。こや舟ハ向ひの岬ふつくんと七〜ゞいふふちくんさい掉ふさとおるく舟ハ中へ漂ひ出る。ふの時一陣の風颯と吹来り怪むべ〜高浪逆波のさろおくこ。あこ洋中ふあるゞゞ。三人周章さめけど遂ふ船ハ波をおあく。舟ハえるく水底へおるくる。舟長い手馴〜業をくく波をつゞりく游つゞ。官太夫ふ斗ハるの業を為得ゞれば。底の水屑となりくくる。かるまつうの枝流ふく麵あやく〜の所為ふもたべるべ。あもと又一〜の因果物語あり。下回を讀得く支詳ふ知るべ〜

第九回

尼ゞいふ
鉦鼓の觀音

体顕且話花方求次郎ゞ契難作助ハ何卒〜く主人の讐人官太夫ゞ在所をとめ。一太力ゝと怒んと。讐人の身ハ遠く逃んも知べるべ。金百両盗とり云命ゆせ〜と

いひあらく。髪を剃圓順と名をあらため。神社仏閣回国の修行者とさすらひ。雲水の身の常なれば。岩ゐる水ハ渇をあのぐ。朽ちる橋ハ貯を消ひ長汀曲浦の旅もいとゞ。まゝも五年を経て。東西ハかちもなく拐〳〵かゝ山とゞも運つさるうゝく面影の俤よ〳〵人ハも環會び。官太夫が水死なせ〳〵ゆあちゞ。又西国をや拐〳〵ゑんと。水戸街道をうちまゞ。菩飾なる夕貞の観音（戻足ハ詣ぐ。僅五六町ゆくうゝふ。いふゝくう路ハまゝひ。つねハ人家もえんゞ。如今とゝかうら四木亀割沼田のいさゝ。一面ハ荒こうる荒野なれど。玄冬の時節なれば千種も霜ハ〳〵。なれ。おうゝも東北ハ風起〳〵。柳絮風ハまさぐ。鶯毛ちふひるゞる。大雪地ハつうる夏ハすむうう。圓順いるゝゞ

あゆゝハ。ひうつの流れうゝ〳〵樹林あう。えあゞれば木くハ時なる花うとあや〳〵。えおうゞ。水ハ置ハ染るゞ〳〵。いま乗〳〵路も。あとさえく。右へゆうんや。左へむうんや。己ゞ足のむくる方をゞゞ。両岐いゞゞ決ゞゞ。哀ハ。もゞ暮ハれど雲うゞく。不のゞゞ彼樹林うう。忽地燈火の光ハうゞ。圓順ハうゝゞ立ゞうえれば果〳〵く一ツの菴あう。間あうハ。ゞ樹ちうく周伽桃を埋ゞ。ゞうねべくもあうね障子ゞゞ。夫さん香の煙ハ。ゞゞ。仏壇ハ燈明をゞゞ。側ハ胡琴一面あるのゝ人うくハえつゞ。あハきゝとゝ同ゞ乗門の若ゞ。ゞハ主庵ハかいさん。ゞゞうゞ。強くも一夜の宿をうくゞ。いゝ本意うく向ひをゞゞ。前面の疎ハ掉さく来る一葉

の〻〻〻ふ舟あり。あを正ふ蘆花の所ふ宿されば羊養ふ
雪をぞあ歌〻く根葉のうぐをまぐれば孤舟ふ秋をのたう
と。異國の人のいひ〻紅塵の外とん。かる處をさ〻くやいひ
んと暫時詠るうち。彼棹させ〻者の養の雪うちうへ
うちつる舟のうへ雲も晴ぬべし姑の山法乃い〻のやうぞ
と吟じおわり。笠をうをとべ年三十ばかりのうぞあやるう。
歯のきうの人ふ梅ゥ香をとめ。歌ろるへいふだうう。翡翠の
窈窕ろるをうけ墨染ふ窐〻さ内へ散る
ちぐあぬ花の枝を山風のさうひく。赤級里の白ひみる〻と
ぞとも云ぶ〻。あれ則此庵の主と云へ枝打戸をぶ雨うぶ。
庭前ふ漕うせく養笠を舟ふ狩〻。かぐう〻ふ寒紅梅を

行手ふうち。行〻ふ一串の念珠を氏ぐ勤卒と赤ふのぶとべ圓頓喧
くいふ。あれハあを同行の修行者ぞるう。降来る雪の路ふうへ孤
村の辻いやぐ何方ゆる夏をまうぶ。憐ひく〻尊尼花軒ふ一
夜の慕悲をとんうへといひいるれば。彼尼ゆく。さ〻の小笹の
ひとふ〻ふ訪ふ人をあれ蓬生ふ何人あらんと。枝打戸押ひう
を圓頓ふ對くいふハ。回回志ふ乃ふ乃雪ふくいさぐや難
笑志ゆうん。とういけ志ハ乃仏の連夜ふく孤ハ此方うう
く成とう宿まうせんがいとくく姿ふ由とどえ女の一人住
ん同行をあらべ兎ゝ角ゝやあれど仏へつうる道ふおらべうう
右のうをふぐうセうへべ。をや小梅隅田村へゝと遠くをさうう。
ハ彼處ふあうと宿をうとあ人常香の火ぐうをうるふうや

下るまろとかぢか。日暮ぬさんかるらく急ぎてくとひさと。泊りうら
ちらくいとられば。圓順へかへさん言葉もなく。その女僧のらみこれ
又理なんかもあらべと。註さべるうう元来し時へひたくさんし。
不斗思入出るいなば主求次郎君月をもいと明日へ
るふ。苦しと旅ふうきまぐとかぐらふなるうらと。ちらべ
し。幽谷院花露及落信士頓生菩提南無佛くとるる。証
るらし既ふもあんらん。女僧ハ顔伽楠ふ花こそ。仏ふ午向君
らしば。いふらひん此声を少。頓く樣先ふ出る止るいらく。
いやるよ山修行者。をやるる雪に咽び。あるるふもるとる
きば。食の石味義の義れぶふいるひるんぶ。きばば
宿きいらやんと少らり圓順大ふ悦び。再生のえ世くと一礼を

迹。脚半草鞋をとり足をそば。けるもちひい志ひ山仏あるとば。
るへ不寝念仏ぢんといふふ。女僧も行くるる。いへも好る道なれ
べふうるる琴をらぐらく山仏ふ手向んとるを見る人蛛ふる
をひんさるを。塵をどちらひちり出ぐ結ると見るふ圓順も共
ふ声のるるるえと巻（巻を剪く仏ふ供ぐ尾きるねくいるふ。
耻しるぐらこうひ表ひ山仏といへふ。深閑ふ花の波るる神ふ祈
佛ふ誓ひ二世のかるうひまよちるるうしぐ。明日といふるるあぐ
ぐらら庵ぢのあしふ夢とるる。さもるひ恰も羽翼をぬるとし
ひふく。薄命桃花のぐく。花落葉舞常のるひを知り墨染
の別へ後世のいるるくらり少るし。念珠を鉢盂巾のうへふの色。
胡琴ひんるるらく柱を雪井ふるるれば。絲らくるるらく

ちぶ綴のさまあり。一度爪を立てれば一反の錆をさくるぐく。
泉の響ハ異なるべし。特殊なる声のあれらんにハ。空飛雁
連もぐとん。圓順も少時ゆるく居るゞ。頓く仏前ハ
香をひねりもみ入れハ運ぶるゝ〳〵仏人ハ環ぶ
いづくの日ゝ双ハ鮮のあるんと。石斗鉛ならるん棒を
ぶるハ。掃枝のかさ南無阿弥陀佛の文字あり。懷中
求次郎ゞ死骸の側ハ落散る。掃枝をうり出〳〵あれ
ぶるハ奇ぶざんべ大ハ悔ぶ。あの女僧発く敵官太夫ゞ
枝葉ぶん。ひつらく註議ぶんと。ものへども。短慮不遂
切とゆらん胸をさゝる。名曲もぶく耳ハいぶん。頓く尾の
傍へハぶぶ。いハ尊尼此棒ハ是割掃枝のぶ〳〵ん。たゞしく

かゝる物を持ふと問ハ尾も胡琴あり。その掃枝ハ去とあや
ぶ物語のさふふハ。三月のあゝ前面の川上ある焼場あそ
舟覆ゞ。如此ぶの夏ハく乗合二人溺死せゝ。元来水練達せ〳〵
ぶる長水をぶくさゞせども遂ハ死骸ぶハ見ぶ過去ゞ。
其頃殊ハ麗なる日。ゝぶも青草を踏く鬱を散ぶんと筆頭
菜金簪草のかづくを摘又ハ川呼へぶぶ根芹ぶぶ
ハ。乱梳ハひさぶぶく一ゝの羽織あゝ。泥砂ハ塗わぶとび
持帰ぶく。柚の中ハ重ぶあゝあれ則その掃枝ハ近郡
の者ハぶ先日水ハ溺〳〵人の羽織ぶんといふ〳〵ものの日の
舟守ハ問へハいハも見覚のさふふ。あゝ世をぶくふ
内分の。一通の問向ぶ〳〵ぶといふぶ〳〵ハ幸掃枝ハい

南無佛の文字あるゆへ。鈴をふらん棒とする。羽織はあのごとく
鉢盂巾をふる〳〵ふりと一伍一什をかさねれば圓順をそ〳〵ゆつて
呵てとひらく。漁人網をひく。江のあのごとく。漁人ふねあるべとゆふ
異なる夏なり。波濤眼を穿洋中ハちらば。かるもんの枝川
あくるものるもあるべ。汝果〳〵く官太夫が親類なるん。彼
緑林白浪の類なるべりもをおもふ。これ根なる脱言なるべ。
いづ主君の仇人何卒〳〵さがし出さんと。ふれとなる金仏
〳〵。手に應ずる鉦をならん。いづれふ隠れ去のごや詳ふ白状せ
よ。〳〵あげくも言ちぐや止るんと。羸〳〵縄をちぐら居
丈高ふ成く問ふくれど。ものとおぼえるれ変るとば。千歳を経
るも肩入いぐ黒白をひるん。只黙〳〵口を鉢く居る。

元圓順左実なる性なれば ひとをちふふるる。緑先より雪乃
中へ尼を跳落〳〵只管責問なるこ。ちみても修行者のゆきなと
さるとこん〳〵。庵の外面ふ行〳〵。いくふそひるん笠ひたちぐら姫
の敵逃さじと懐刀ふく蕎地ふ圓順ゆぐけ切くかるわ一蓋れ
抓潜くなりとをまるとるん〳〵。此時日ハ全く暮るとぐと雪光
ふそる〳〵るの容色をるもべるるとも又女僧へるる〳〵人遠へ
なれば多ちるく圓順をおるこ。修行者ふハ花方求次郎
の家臣作助ならばやとゆふふ圓順をつくぐるるふ姿かへを
ど花子へなれば互ふ不審なるざる。圓順ものつとと姫
の仇といひ〳〵緑由を問ふ。花子いふハ。足下のものひし
名号の掃枝ハ。いかゞ親なる芦部兵藏といふる者和藏し

あんあんあまをかぶりのかくりかくんとせるあまめをうく又あとはあんあんをかくれかりとそらさんとする

く持ちしが。上總國にて雲舞半六といふ悪棍にこれを奪ひ
姉を殺し立退しとぞ。その掃枝おうびにてこの賊宿掠取ること
のち卯月官太夫と姓名をうつし。さてふるふ風説あり伊勢
諸共ちらこく探索せども縁なくして回逢ばいまを外面のうと
く。掃枝ちう夏蔑こと首尾ろく〻ゆ〻足下のもち
のふとおりし。夜眠ふ官太夫とゆゆしい遠しと語る圓順もこ
とあるをうら。いざ主水次郎君の仇人といへるも彼なりとをじめ
を詩ちをとふふ。花子圓順ふ對く。いかるにかく殘暴な
る夏たなるふ。此尾君の寛ふ夏実を夏なるやび大なる条怨
なると。忙敷扶起ふ尾い言葉を出さんとすれども口籠り
くつやく言出ず。花子柴を焚尾の耻を煙るふ。やあらく

涙湧夏泉のごく漸くに口をひらく。我君の由縁のはかふ
さふらひしや。今ふ何をか裏ふらん。いろ〻巴様の殘女津嶋と
と少ちう圓順悲然さしく。さてはいざ主君龍顔他ふ異なる婦人
を。神ちうぬ身の雪ちうぐ。暫時も離を苦ちふ伊ぶ
つくいうんちんと胸を抑へく卒怨をいづるふ津嶋尾い夏
いやたる宣ひそ。いざ主君大切とおもふ紅ちう茂こと夏か
ばいふふ。さ内ふ思ひ付ちん。我君横死ふ〻ぬ
眉を画き紅唇を彩るふ憂く。且ふは泥黄泉のかへ
ゆふ千里の服ふ嘯く。ゆゆしく花菖の苦ふ
ちめふちの由縁ふちう只管後の世を管見ふ
の誓提の寓く。ちんと先ふ内ふ宿ちいちんと我ふとぞ

花露及落信士と唱へ給ふ。ふと見とゝ文字あり。さてハ我
の志を伝ふ及ぶやと。果ハつまさんと
止ゆるもゝ〳〵ぞ。今ぞ知る。ゆゑ則求君の法の号なりしを
おさんとまれど流るゝ。ふりぐと物語ば二人も共ハ
哀をとゝめやり。尼うたわくいふハ。さくハ日外前面の川ハ死
ゝ旅人なり。求君の仇敵なりるゝと。迫さうゝ三の品ひ
出られ。くと泣居るゝ。圓順佶と云つゝ。鉢盂巾をとりあげ。
これハ則官太夫ゝ羽織なるべ。空衣を剥〳〵例ハ引ぎ疾
〳〵と云ふ二人も懐刀援連く。殿の敵主の仇良人ハ見
求君の横死ハ彼ゝ罪ゝと。さんぐハ貫く本意を遂ゆし学
びをとゝ。ゆのゝれ漸て雪も小止。雲ゆぶらく月燈火を挑〳〵。

庭の面ハ白孔羅のうへハ砂金をちらせ〳〵ぞくちらゝ。
一陣の烈風吹来り燈火颯と消えぬ。四隅のうちさ行とゆうんゆの
蛇空中より来る。津嶋尼の口のうちハいると見へ〳〵ゝ撞と倒る
息〳〵。こいつハ〳〵ふと。花子圓順抱起〳〵ゝ抱ゝハ。
少時ありて頭をあゞ。花子を見てく涙さゝぐ。花子いとを何人
ゝふ。此世を去ゝ〳〵澤ゝ雲へ汝ハ乎ゝ〳〵ゝ。
ゝの女僧の體をうゝ〳〵。いと死〳〵くゝ四足面體ハ埋ゝ
ゝとゝ。怒ハ須臾の間もゝまれざりしゆゝ。伊云清
爽智ハうつくいとゝ遠ざけ。汝を我仏と尊ゝ往年月ハ望
く。明珠連城宝ハ子孫をあく宝ゝと賞言吐〳〵

憎くとおもひ。その病篤ふく悦五郎を殺さんとするに愛子のわらと
ふるう。伊兵衛ぞ心儀ふ弱う。兼て怨んとおりへど法華経ふ
も説ぐ。人氣猛なるに水火も焼溺さる事あさひ虎豹
も牙をつぎぐ。その見ふ臨ぐ者のもふ村子伊兵衛
を狂死せしめ。汝をもおるぐ。ちふとおりひ。うど。諸国の夷
堵を巡拝し。伊兵衛いさんいづあるとも脚ふ人あるを
なんぐを殺さんふ。我為に一遍の念仏を唱ふる
人いあらざるふと年を経るうち。大徒の教化あらう。天堂ふ
花を得んを遠ぐ。汝孫仏門ふいると。伊兵衛二人の兒ら
あと弔ふぐ。ひと因ふ語ふ さん。大途血途ふ途合く三途
の苦ふ求次郎ら横死ふ強いぐ者ねぐふをあらぐ。

彼が所持るいと神符を血をのく機せ人天神地祇
の罰を兼て。官太夫が釵の錆とそえるもぬ。ひとるの虚ふ果じ
金吾ふ狂氣るさしめ。伊藤の家ぞそやしぬ彼卯月官太夫ふ
求次郎を殺害る。挟嚢を奪ひら。彼神符中ふあらしを。
るのもくもやらぐ持さらしが。此神符ふ河泊の好むふり。
二月三月の間ふ海若の免をうけ。遊行るふの月るれば舟ふ
果克を。あるふ税部の警しうど官太夫ふこれをちぐ。
舟ふ果ぐく遂ふ命を失ひ。いづ怨もいるるいぐ子
ふふ人とのあをを串ふふもぐと言おうら。がぐと御ちぐ芝の
小蛇庭前ふ生るとるふ。ぐ一堰の髑髏とるぬ国ふ外
夷のうのがら一伍一什を少く。いづ本意を遂ざる由縁を

願以此功德

平等施一切

同發菩提心

往生安樂國

ちり。花子ハ今さら圓順が面をくゝと居さるゞくゝと畢じと涙をさめく尾を抱かこ。圓順諸共に抱るゝ。漸く息出驚夢の覚しぐ。いかなる夏とはなをきらゞ。圓順花子ハ有枝有葉をりのごゝ。三人等く落命をとゞけく。やおらく圓順花子ハ元仇人宮太夫を討んと彷徨出立し墨染も今ハあらく仏縁となるぬ。長らく人くのあと弔ん。二人の号尾ぞいうん。拾花いろく。けとハちれうう上總國なる光明寺へと赴るれば。同庵ハ寂ん。圓順頭ハ。いとゞ三十ハ過る女僧と。室ハ居んい。人のゆりうんあんとあ〜からんとうけひゝび移るく病ぬ。二人の尾ハ別を告。鉦をゆらしく出ぬ二人の女僧ハ光明寺へ入り。形ばかりなる庵をもとゝび。仏ハ寂ん。夏なるく。赤ゝく鉦をゆらく賊の目や覚さんと。指ハく摺つく佛名を唱へ。ハらく。年を経く彼鉦鼓自然と四ハ。かく或夢の夢ハ音楽の声雲中に少えゝゝゝ。ゝゝゝ頭をあゞく空を望ハ。行くゝく華降りぐゝ。容顔端美の菩薩。荘厳の蓮華ハ坐し。雲ハ無ゝと来りゝ。あるゝく掌を合せ拝伏奉るハ。ハゝゝ伊兵衛沢子未次郎をたゞ。ちく者ども。婆婆ハ。ハゝ姿ハ。ハゝ南無仏と唱念ゝとゝ。松吹風ハ夢をゆゝと。香顔薬顔都ゝく庵中ハゝゝ。寺異の夏ハ。二人の女僧

ひとしく語出夢あらせもうけ。津嶋尼ぶつる所也又花子の夢也。半歌のうぶひるる。さらに往年光夷のいひしぶく。天堂ハ化を受しもうんと。いとうのしくあぶん。遥ハ年を経ハ同年同日時也ぶつ二人の尼眠るぶく大往生を遂ハる。その後彌馬の祠ハく。此寺一時ハ鴉鳴とる。夫鎮ハく後一堆の灰を拾ハ捧四ハ捧ハる鉦鼓仏前ハあらく焼ぶ。鑪鞴をあく工しぶく。圓通の尊像と拝ぶ。殊更霊験掲焉。諸人奇異のおもひをなし。鉦鼓観音とあづけぶくあらしくもん。彼圓順も仏門の志ハく。日本回国の修行者圓順といふる。供養仏石碑るど国ハ有。されどをうしく所ハ詳ハ書ぶ。あらぶと本意を遂るべ何られの書ハを

ぶ口碑ハもぶ。さらん。物嘆しぶ夏あらぶや

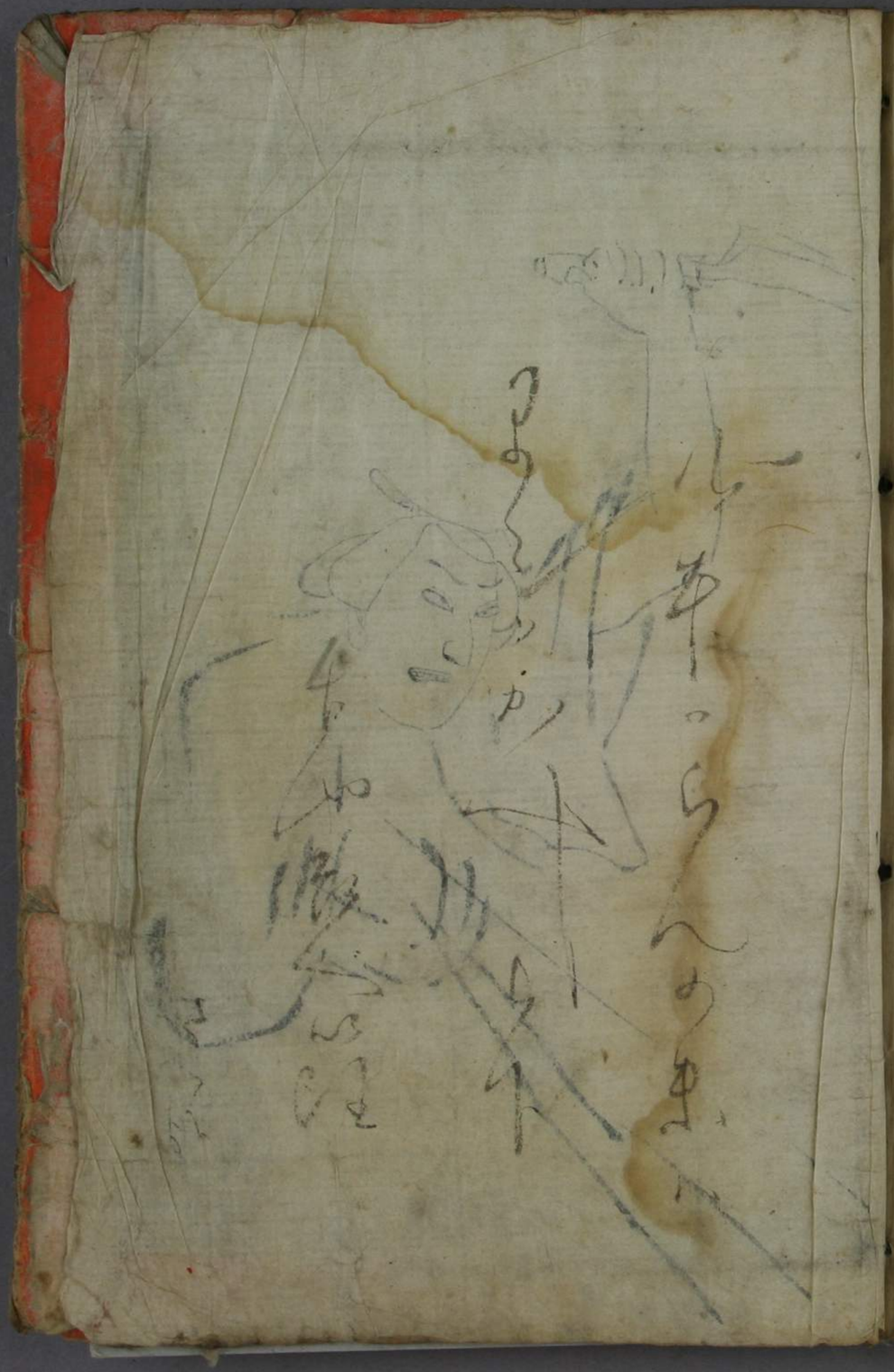
霜夜星五巻畢

清山　ゆを

加津しろ　北斎画

柳亭　種彦作

板元　浅草御蔵前　須井善橋



文化五年戊辰春正月吉日

書林

皇都　堀川通　植村藤右エ門

浪華　心齋橋筋唐物町　河内屋太助

東都　馬喰町三丁目　若林清兵衛

御成小路平永町　山崎平八

復刻　秋桃川畫

阿波の鳴門　全五冊出来

鴻飾北斎畫

徳角物語前編　二冊出来